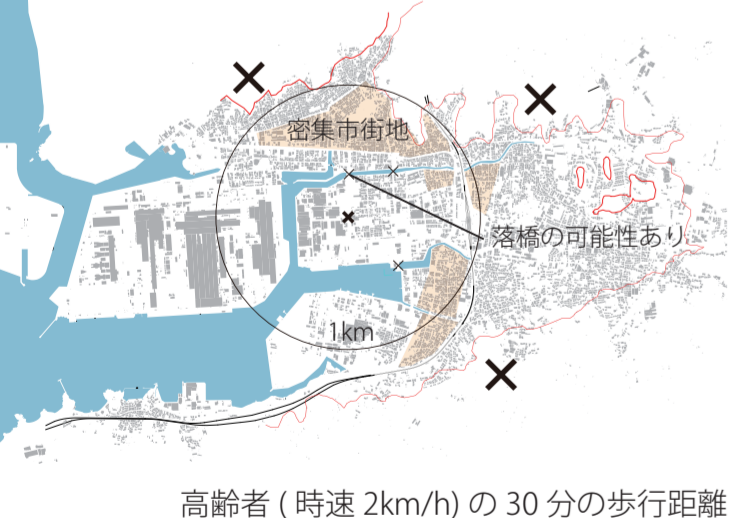
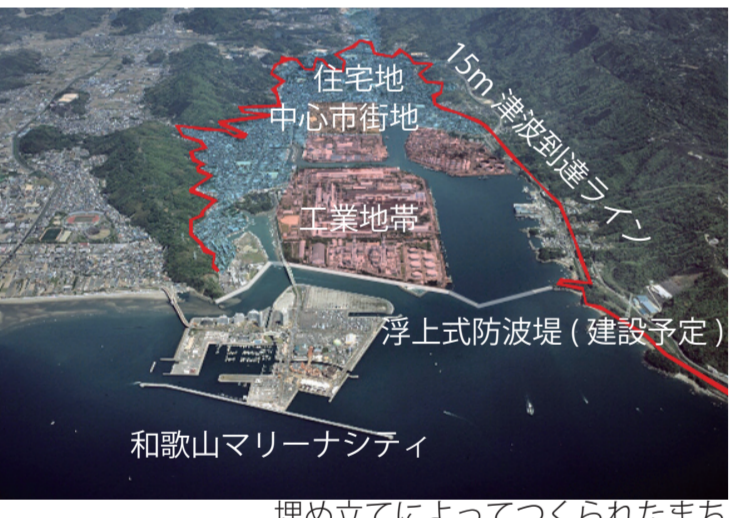
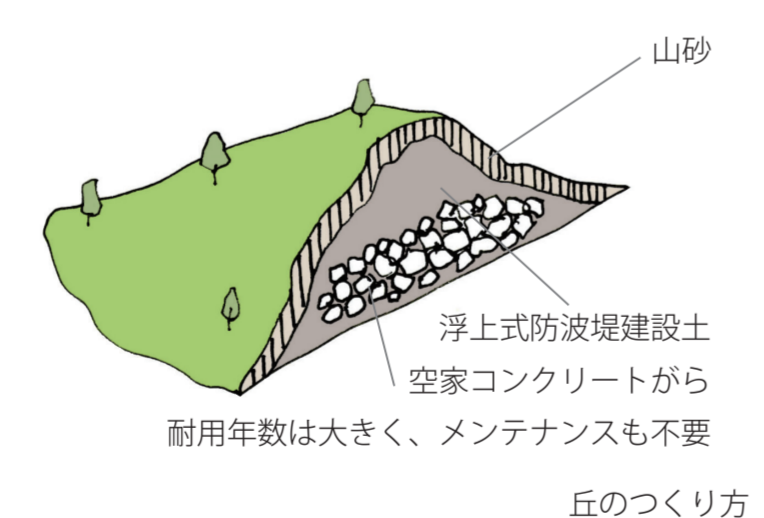
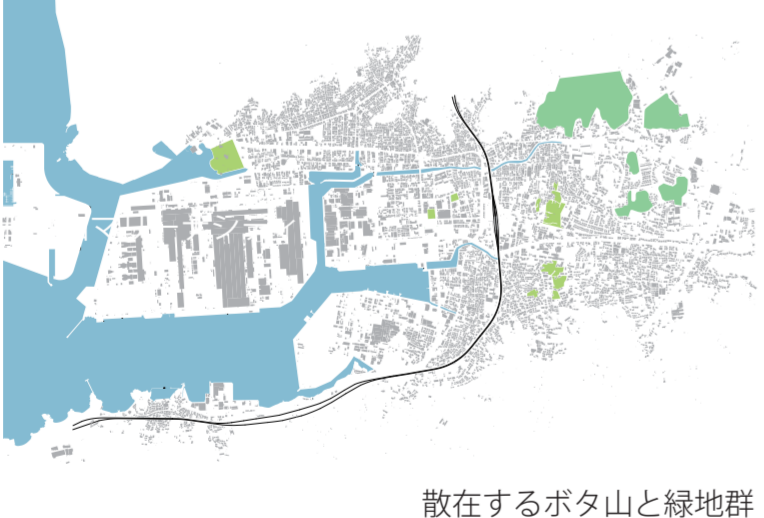
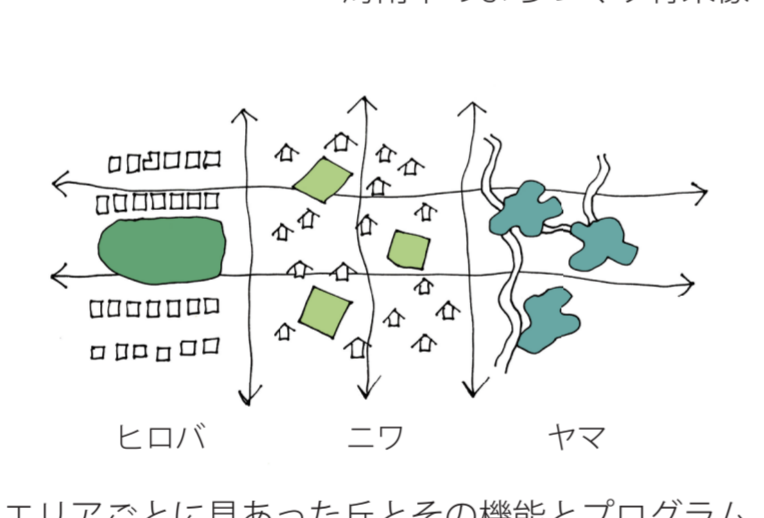
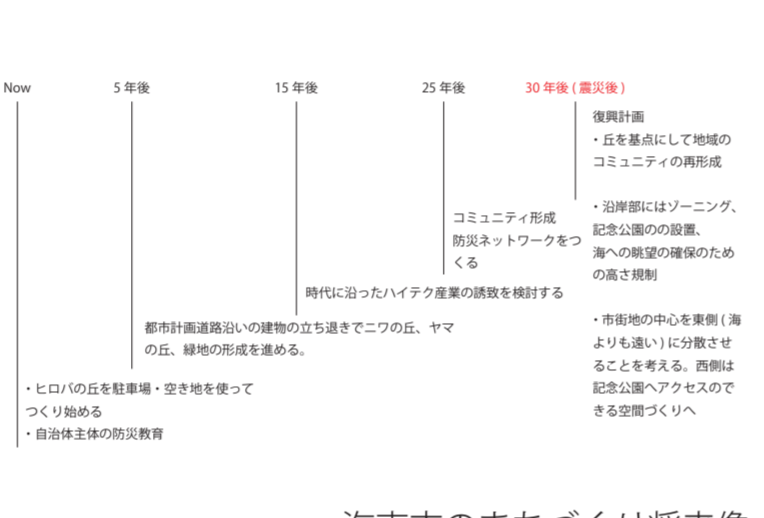
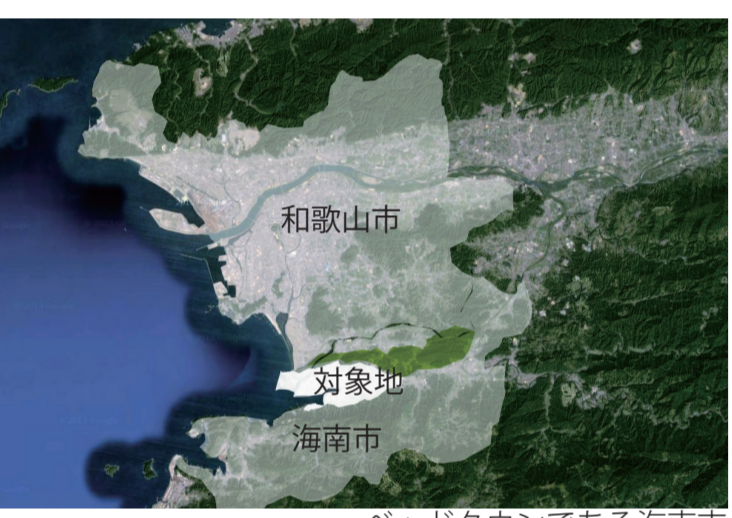


はぐくむ丘、ゆわえるまち - 縮小の時代における津波防災まちづくり -

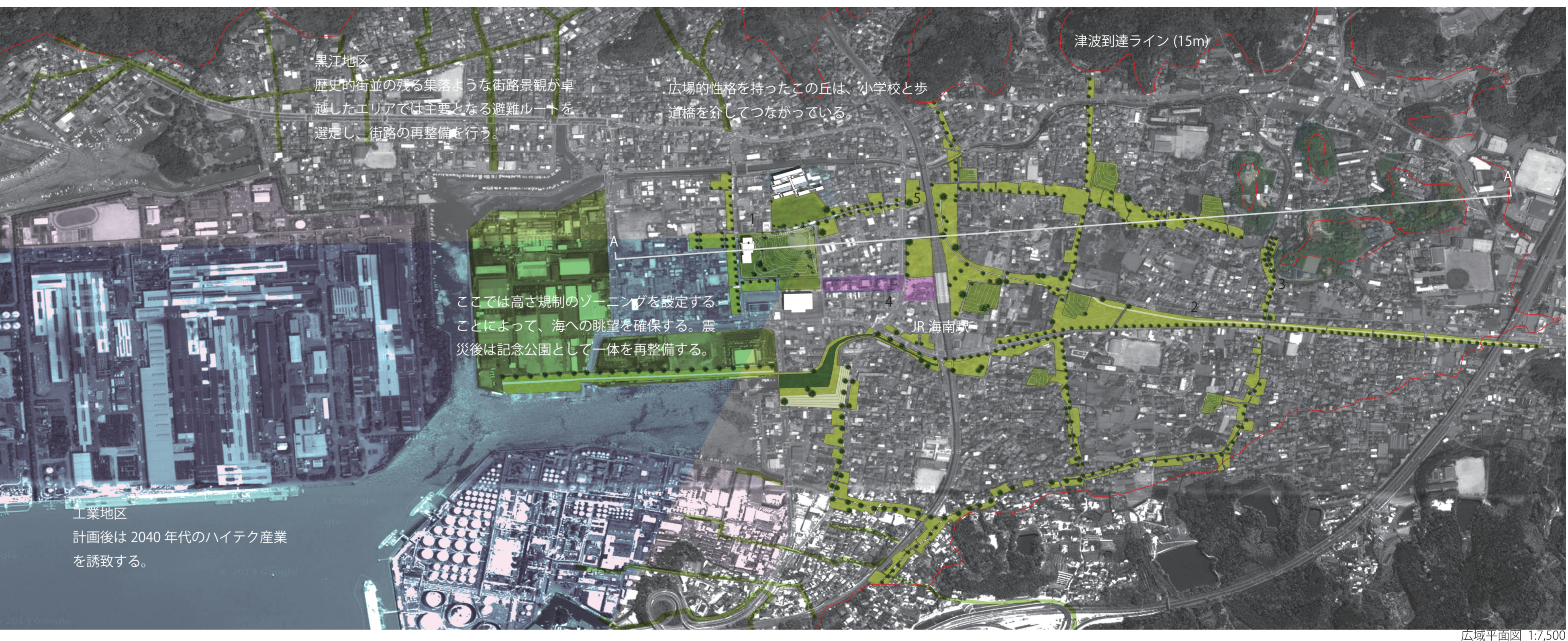
本提案では、防災対策によりつくられた丘と緑地が分断されていた海やまちをつなぎ、空き地を充たし、コミュニティのつながりを可視化し、まちに活気を取り戻す。
人口減少、高齢化という避けることの難しい問題がある中で、ここ海南地区ではコンパクトな防災まちづくりを提案する。緑地や公園、快適な住宅環境などアメニティに特化したまちのあり方をめざしていく。ここに残された人々のケアは怠らずに続けていき、工業地帯や住宅地域、その他商業地区などをその場所ごとに適切なデザインを施していくアイデアである。



対象地概要
和歌山県海南市 西部
面積：101.9km² (市全域)
人口：52,943人(推計人口、2013年9月1日)
海南市は和歌県の県庁所在地である和歌山市に隣接するベッドタウンである。ここでは今後30年以内に60~70%という確率で発生するとされる東南海・南海地震(最大想定M8.6、津波高さ8m)が発生した場合、津波による甚大な被害が危惧されている。リアス式海岸の湾奥に位置しており、その地形的特性から、これまで昭和南海やチリ地震等により津波被害を被ってきた。

海南市における問題点
海南市は少子高齢化に伴う人口減少、空き地の増加によるコミュニティの弱体化、中心部のシャッター商店街、青空駐車場のパッチワークなど、日本の各地方都市にみられるような深刻な問題を抱えている。加えて、産業の誘致による海沿いの大規模工業地帯が海までのアクセスを分断する大きな障害となっており、かつての港町の面影は微塵にも感じられない。また、高齢者独居人口割合の増大も懸念されており、津波対策と共に地域のコミュニティをどう強化させるかが大きな課題となっている。

考え方：防災拠点そのものがコミュニティを可視化させる
本提案では、南海・東南海地震が発生する可能性が高い30年前後をタイムスパンとして防災・震災復興計画を提案する。「沿岸部津波到達地点まで逃げる事が出来ない」「弱体化したコミュニティとつながりをもつことが困難である」ということを鑑みて、防災拠点そのものがコミュニティの存在を可視化させ、まちの顔となる。震災時は津波が標高15mまで到達し、丘と高層建築物以外の構造物は、浸水してしまうものと仮定する。



コンセプト：異なる性格を持った丘と緑地のネットワーク
エリア間交通、都市間交通の円滑な移動を実現するため、海南市では大規模な都市計画決定が行われており、都市計画道路上の住居はいくらも立ち退きが完了している。それらを利用し、空き地のパッチワーク、既存の緑地、公園を一体的に考えることで緑のネットワークを計画する。さらに防災、コミュニティ形成の両観点から丘の配置、規模、数、用途が決定されている。エリアごとに異なる丘と緑地の性格づけはまちに賑わいをもたらす。

緑地のネットワークによる助けあいの集約化
津波が到達するまでに40分という時間が想定されているが、密集市街地が多く、高齢者の割合が高い海南市の中心市街地では、住民が安全に避難することは極めて困難である。
緑地を避難ルートとして明確に認識し、それがネットワーク化されていることで、災害時避難する際に人が集まる場所が生まれる。そこで助けあい、避難行動の集約化がなされ、住民の安全な避難につながる。

ヒロバの丘：海とまちを繋ぐ高台
JR 海南駅より西側にある中心市街地エリアでは、小さな店舗やオフィスが通り沿いに軒を連ね、海南市の玄関から続くまちの顔となっている。広場の性格を持ったこの丘は15m以上の津波にも耐えることができ、一時避難としての高台の機能を持つ。海への眺望も確保されており、利用者がこれまで分断されていた海を身近に感じることができる。市役所、小学校、医療センター、商店街などと接しており、沢山の人が公共空間へと参りだしていく。

ニワの丘：防災拠点がcommonsペースになる
閑静な住宅地の中におかれる小規模の丘の群は、自治体の領域や数、規模を単位にして決定されているので、各々のコミュニティがそれぞれの丘の使い方をすることができるよう配慮されている。それぞれ高さは5~8mほどで、緑地避難ルートを広く見渡せる所に位置しているところから、丘の日常利用から防災への意識を持つことが出来るようになっている。また、市民が菜園として日常利用することで、自治体の存在が可視化される。

ヤマの丘：市民が親しみをもつハレの空間としての避難場所
15m以上の高さをもつ既存のボタ山は、神社やそのふもとを通る熊野古道など、地域との結びつきが強い場所性を持っている。ここでは、祝祭空間としてのイベントも充実させていくとともに、サイクリングやハイキング、プレイグラウンドなどのアクティビティに特化した整備を行う。避難ルートを通して内陸へ逃げてきた人々はこの高台におけるプレイグラウンドや神社に避難することになる。

